

さみだれを集めで早し最上川

〔東遊雜記七〕抑此最上川といへるは海内第一の早川にして、流は瀧のごとく、左右は大山峨々として、きおいかゝり、舟を寄る便り更になく。○中略此川は、早川と云のみにて、大河と云にもあらず、此ころ雨しげく、常水よりは三尺計も水まして如斯と舟人の云也、見る所東海道天龍川の常水ほどはなかりしやふに思われ侍りし也。○中略

予畫にうとくして、最上川の圖たる所更になし、左右の山峨々として、岩石きほひかゝりて、左に記す瀧あまたにして風景あり、亥かし所せまくして、聞し程の景にはあらず、清水より清川へ七里の舟路といへども、八九里もあり、山川早川にて危く、折ふしくつがへりて死亡のものありと土人の物語也、此頃は既に清川のもの二人死せしとなり。○中略

頭光瀧　佐々木の明神　危日瀧　千本の瀧　多木澤の瀧　鷹巣瀧　馬の爪瀧　葛の瀧　舟かな石　八幡の礫石　十夕し瀧　柳瀧　七瀧　ウルシ瀧　大の瀧　早瀧　タバ子瀧　瀧クラヘ瀧　錦明神　浮石　石瀧　白糸の瀧　何れも雅なる名のありて、やさしく聞ゆれども、象あるにはあらず、案内のもの、記を寫し侍るなり、清水より清川までの川筋に斯のごとし。

〔東國旅行談二〕仙人堂

同國○出　最上川の川邊にやり、此川は流はやき事は日本第一といふ、大石田宿といふ所より秋田へ行たび人は、此川船にのり、相貝宿、鷹の巣宿、古口宿、清川宿まで十五里の間也、其ながれ早きこと矢を射るがごとく、三時ばかりに清水へ著事あり、又渴水の時は、一日もかゝる事も有とかや、此川に四十八瀧、四十八瀧あり、中にも白糸の瀧とて名所なり。○中略堂守の修驗者は、杉の木の大丸太を舟の形に彫たる長三間ばかりなるに乗て、大杓子の如くなる物を楫として、旅人の船に漕よせ、纜をもやるて御札御符を授あたふといふ、諸病平愈の御守なり、則仙人大權現と拜し